

## さくら児童クラブ指導員研修会 I

平成26年5月30日

18:30~

さくら児童クラブ室



参加者：さくら児童クラブ指導員

### 始めに～

さくら児童クラブから、指導員研修の企画を受託したので4回の研修を実施した。初回はニーズ調査ワークショップを中心に課題点の把握をする。

### グループ討議

#### ① こまっていること

- ・情報の共有ができていない
- ・子どもへの働きかけ→自分が悪いと思う心を育てるにはどうすればいいか
- ・どの程度、子どもを許すか
- ・けじめのある態度とは
- ・あいさつのできない子どもにどう教育するか
- ・寝てしまう子ども→寝かしてしまったほうがいいのか
- ・けんかのときの対応の仕方
- ・どのように（困っていることなど）聞き出したらいいのか、うまく対応できているのかどうかわからない
- ・みんなと同じ行動のできない子ども、どう指導すればいいか
- ・負担金が未納のところが増えてきている
- ・水が使えない。水筒を持たしているが、夏になるとどのくらい持たせばいいか
- ・松山市内の児童クラブと交流が持てない（情報が入らない）
- ・行政の相談先が不明
- ・児童クラブの児童数が多い

## ② いいところ

- ・行事が楽しい、おやつが美味しい
- ・待機児童数0
- ・指導員が前向きで、子どものことをよく見ている
- ・子どもがのびのびしている
- ・たくさんの方がかかわってくれている
- ・問題解決しやすい環境にある
- ・子どもと共感できる
- ・子どもはたくさん友だちができる
- ・運動場で遊べる、おもちゃがたくさんある
- ・障害者用のトイレがある



## ③ 改良点

- ・運営上のこと、家庭との連携
- ・勉強のこと→子どもが集中できない→放課後子ども教室等の活用および個人記録、先生への情報発信
- ・子どもへのゆとり
- ・会計処理に時間がかかるので会計ソフトを購入して、空いた時間を子どもとのかわりにつかう。

## 村上伸二 評

話を聞いていると、良い話の方が多い。さくら児童クラブのレベルの高さを感じる。ベースは、前向きであること、話し合いがなごやかであること、元気な子どもが多いこと、指導員が子どもの姿を捉えて伝えていること。

指導員の仕草は子どもにすぐ伝わる。自分が身に付けたものをすぐ隣の子どもへ伝染する。指導員は、給料をもらって、生きて育つ人間が相手なので、ストレスがあってもにこにこしていなければいけない。

管理的だと、秩序はあっていいかもしれないが、大人の圧力に子どもが従ってしまう。子どもの将来のことを考えるとマイナスに働くことのほうが多い。20年後の日本を支えるメンバーとして、大人を乗り越えて生きていかななくてはならない。子どもを育てることは大きな責任を伴う。

学校教育は勉強させることが課題である。勉強させるためにはどうすればいいか、多方面から考えている。子どもの将来を培う場として学校がある。地域は、今起きていることをどうするかということが課題である。児童クラブはどのようにとら

えるか、性格づけをするのが難しい。学校の中の部屋を借りていることで、学校とは違う児童クラブの独自のねらいを見つけたほうがいい。親は、子どもを安心して預ける場所として児童クラブがある。一緒に生活をしている指導員は、事故のないようにすることと、100人余りの子どもをどういうふうにやっていきたいか、明確にする必要がある。さくら児童クラブとしてどのような性格ですか、試行錯誤しながら自分たちでつくるしかない。

また、施設設備の問題がある。学校の設備を自由に使うことはできない。有効的に使うことが出来るかどうか、学校とよく話し合った方がいい。10出して、半分通ればよしとする。

運営上の問題は、いろいろやりすぎると管理的になるのでほどほどにする。環境整備のこともあるが、子どもの世界のことは子どもに任す。昔の地域は子どもの自治が認められていた。現在はない。作れるところは児童クラブだと思う。子どもと指導員がかかわる部分と子どもに任せる部分とどのように分けていくか、児童クラブの子ども集団の経営をしなくてはいけない。

また、人によって違うが、大人の子どもに対する見方は、バイアスがかかっている。しかし、どの子どもも、真っさらで何色にも染まっていない。このような話がある。遺伝的にはまったく同じ卵性双生児を一人は家庭で、もう一人は違った家庭で育て10年間経過を調査した。また、同じ家庭で育てた双生児を対比したところ、二人を同じ家庭で育てた双生児となんの変わりなかったそうである。

アドラーは子どもは優越性を持って生まれてくるという。一人一人「譲れないこと」を持っている。一緒はいや、ちょっと違うものがほしいのである。やんちゃな子は満たされないものを持っている。大人が気付いて対話して認めてもらいたがっている。大人は知識を持って、目の高さを一緒にして対話し子どもの心を理解する。目の前には、勉強材料がいっぱいある。「どのように」「なにを」「のぞむ」のか、積み重ねていけばいいと思う。

